



TITLE:

擴張再生産表式について - 織戸學士に答ふ -

AUTHOR(S):

柴田, 敬

CITATION:

柴田, 敬. 擴張再生産表式について - 織戸學士に答ふ -. 經濟論叢 1934, 38(5): 1062-1068

ISSUE DATE:

1934-05-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130442>

RIGHT:

京都市大學經濟學會 經濟叢論

第三十三卷 第五號

昭和九年五月一日發行

論 叢

相續税と登録税との交錯……………法學博士 神戸正雄

節約の矛盾について……………文學博士 高田保馬

人口稠密の原因觀……………法學博士 財部靜治

時 論

日蘭會商の諸問題……………經濟學博士 谷口吉彦

研 究

北海道鯨定置漁業に於ける漁場動員……………經濟學士 岡本清造

相續税の本質……………經濟學士 三谷道麿

リカルドオの比較生産費說について……………經濟學士 朴 克 采

景氣觀測について……………經濟學士 祭原光太郎

說 苑

擴張再生産式について……………經濟學士 柴 田 敬

肥前有田陶業の發達……………經濟學士 江頭恒治

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

説苑

擴張再生産表式について

—— 織戸學士に答ふ ——

柴田 敬

はしがき

經濟論叢昭和九年一月號に於て、固定資本のある場合の擴張再生産の構造を分析するに際し、私は、其の點に關し先鞭をつけられた織戸學士の功績を記憶し、併せて、それに對する卑見を述べて置いたのであるが、それに関する織戸學士の返答が、社會學徒三月號に於て發表された。それは大體二つの部分から成つてゐるのであつて、第一の部分に於ては、私の批判に對する返答がなされ、第二の部分に於ては、私の解決したる問題の一部についての學士の獨自の解決——結局私の解決したる所と同一の結論に達すべき——が示されてゐる。第一の點は、私の文劣くして、眞意が傳はらなかつたのによるものが多いのであるが、第二の點は、學士が今度はじめて發表せられた所であり、殊に、

鋭い洞察力が伺はれて、啓發せられる所が多いのである。以下之等の點に關する卑見を述べて、感謝の辭にかへ度いと思ふ。

一、私の批判に對する學士の返答

織戸學士の説に對し、嘗つて私は、二つの點について、批判したのである。従つて、學士の返答も二つの點について、なされてゐる。

(一)、織戸學士は、嘗つて、事實上固定資本を捨象せるマルクスの擴張再生産表式の使ひ方を批判し、マルクスが豫想した資本蓄積率を保持しつゝ、固定資本を考慮に入れて、其の表式を見直す時には、均衡は破壊される、と言ふ事を論じたる後、「此の計算は恐らく次の如く改められねばならぬだらう」と言つて、學士獨自の計算を示された¹⁾。私の第一の批判は此の點に關するもので、織戸學士の示された計算に従つても、依然として不均衡を免れ得ない事を示し「斯くの如き結果になつたのは、織戸學士が、同一の擴張再生産表式もそれが前提する所の生産擴張率は、固定資本のある場

1) 織戸學士「社會的資本再生産行程の分析の一部」(經濟研究 昭和三年七月號) 119頁。

合と無い場合とによつて異なる所以の構造を充分に究める事をせずに、勝手な率の資本蓄積を、與へられた表式にあてはめられたのに由る」と言つたのである。これに對して學士は、「私は何もあの表式を訂正表式として確立したわけではなく、マルクスの立場に立つ限りこの様にでもせねばならぬであらうと言ふ意味で掲げたので……尙あの際とつた數字は私の勝手な數字ではなく、マルクスの立場より取るであらう處のそれである²⁾」と返答されたのである。マルクスのまゝでは不均衡になるから態々書き替へられたはずであるのに、意識的に、又々不均衡になる様なものを採つて來られたと言ふ事は、如何かと思ふが、然し此の點は、深く問題とする必要はない。何となれば、其の際織戸學士の示された計算によつても依然として不均衡は逃れ得ない事、及び、其の不均衡が、「同一の擴張再生産表式もそれが前提する所の生産擴張率は、固定資本のある場合と無い場合とによつて異なる」と言ふ點を充分に究めて得られたものでない資本蓄積率を、與へられた擴張

擴張再生産表式について

再生産表式にあてはめた爲めに生じたものである事、の二點さへ明にされれば、私の言はんとした本旨はそれで足るのであつて、斯かる計算其のものが、織戸學士の恣意に出でたか否かは、私の問題とする所ではないのであから。

(二)、同一の擴張再生産表式も、例へば、固定資本の無い場合には1・11の擴張率を前提するものであるのに、固定資本のある場合には4・14³⁾の擴張率を前提するものとなると言ふ様に、固定資本の有無によつて、それが前提する擴張率は或は小さく或は大きくなる。換言すれば、擴張再生産の場合の方が單純再生産の場合よりも、生産手段部門の消費手段部門に對する比が大となるのであるが、其の大となる程度は、擴張率が同一であれば、固定資本のある場合の方が固定資本の無い場合よりも甚だしい。即ち、擴張再生産の場合の方が單純再生産の場合よりも生産手段部門の消費手段部門に對する比は大となると言ふ事——それこそ擴張再生産論の問題の重點なのだが——は既に固定資本無き場合

2) 織戸學士「擴張再生産表式について」(社會學徒 昭和九年三月號)16頁。

にもあるのであり、固定資本のある場合には、固定資本無き場合の右の事情が更に強化されるに過ぎない。従つて、擴張再生産行程の分析は、マルクスが事實上行つた如く、固定資本無き場合についても行はれ得るのであり、斯くして得られる理論は、固定資本のある場合の理論の中に、止揚包攝されるもので、其の意味に於て、それは、其の後の研究にとつて基礎的研究たる價值を有する。斯うした事こそ、私がこれまで究明したる所であり、其の立場から、「(事實上固定資本無き場合を取扱へるマルクスの) 分析と手を分たさる限り……擴張再生産行程分析への道が全然閉されてしまふのである。……マルクスの擴張再生産行程分析なるものは……其の後の研究にとつて基礎的な價值を有する研究で……ない」との織戸學士説を批判し、「これは言葉が過ぎてゐる様に思はれる。」と言つたのである。

これに對して學士は、「表式に應じて蓄積率を定むるならば、其の出發點たる第一年度だけは固定資本の有無に拘らず同一數値の表式を作る事が出来る。是は……

寧ろ當然ではなからうか……(柴田)は表式其のもの並に表式作成の態度に重きを置かず、餘りに其の出發點に於ける數値を重視して居……る。」と言ひ、又「固定資本を顧慮するとマルクス表式が成立しなくなる所以を主張すれば(柴田に對する)……答になる……そして私の此の考は、(柴田の)……批評の後も改まつて居らぬばかりか、……(柴田)によつて一層證明されてゐる様に考へられる。……其の出發點に於ける兩部門の割合が同一で、(固定資本の有無によつて)蓄積率の異なる事は、むしろ既存の兩部門の關係に或る變化を生じた事を暗示してゐる……再生産の表式論で重大なのは其の出發點に於て取り得る數値ではなくて、各種生産部門間の關係の究明である……所でこの兩部門で代表される各種部門間の關係は、……(柴田の所論)に於ても二つの場合(固定資本のある場合と無い場合)同一でないとするれば、固定資本のない場合の表式が是の存在する場合に當然變化を來し、従つて廢棄されねばならぬと考へるのは無理ではないと思ふ。……マルクス表式……(と柴田の)

それとは相距る事遠いのに、(柴田)は此點を認め：ないのはどうしてであらうか。」と返答されたのである。⁴⁾

此の返答は、私の文を劣くして、私の言はんとした眞意を全然傳へ得なかつたのによるものである。私は表式に應じて蓄積率を定むるならば、固定資本の有無に拘らず同一數値の表式を作る事が出来る事を、當然でない等とは決して言つてゐない。蓄積率を同一とすれば、固定資本の有無によつて、擴張再生産の表式は異つたものとなる事を、私は決して否定した事はない。再生産の表式論で重大なのは其の出發點に於て取り得る數値ではなくて、各種生産部門間の關係の究明である事、兩部門で代表される各種生産部門間の關係が、固定資本の有無によつて同一でない事、等々、すべて私は否定した事は無い。まして、態々マルクス以上の體系を出すべく苦勞して來た自分の表式の出し方とマルクスのそれとの差異を、否定しやうなどとは思ひもしない。すべてこれ等の點は、織戸學士に對して筆を執つた場合の私に於ては、はじめから問題でなかつた

擴張再生産表式について

のである。問題は、「擴張再生産行程の分析が、固定資本無き場合についても行はれ得るのであり、斯くして得られる理論は、固定資本のある場合の理論の中に止揚包攝されるもので、其の意味に於て、それは、其の後の研究にとつて基礎的研究たる價值を有する」と言ふ事を否定されるかに見える表現を學士が用ひられた點にあつたのである。

二、學士の說

經濟論叢一月號に於ける拙稿は、固定資本のある場合の擴張再生産の構造を分析したものであるが、それは、二生産部門間の連繫の問題のみならず、更に多くの面の分析に資すべき體系である。これに對して、織戸學士は、特定の假定の下に於ける二生産部門間の連繫の面のみに關する理論を、展開されたのである。それは、次の如く述べられてゐる。

「假に各種生産部門を固定資本生産部門、消費手段生産部門の二つに要約(する)。……次に……兩部門間

第三十八卷 一〇六五 第五號 一三九

4) 織戸學士「擴張再生産表式について」前掲16—7頁。

の資本の移動は(無いものとする)。……固定資本(の消耗部分?)は年々現實に消耗(補充?)されると假定する。

固定資本の平均存続年限を十箇年とし、今年に於けるⅡ(消費手段生産部門)の擴張不變資本を ΔC_2 ……Ⅰ(固定資本生産部門)の擴張可變資本並に資本家の追加消費部分に當る部分を其々 $\Delta V_1, \Delta k_{10}$ と……する。生産の擴張率を γ とする。……(然る場合) ΔC_2 は如何なる部分より成るかと言ふと、一、 ΔV_1 及び Δk_{10} ……(及び)二、前年擴張せしⅡの不變資本—— ΔC_2 の $1-\gamma$ に當る——の $\frac{9}{10}$ 、(の 110 である)。故に、 $\Delta C_2 = (\Delta V_1 + \Delta k_{10}) + \Delta C_2 \cdot \frac{1}{10}$
(これは、 $\Delta C_2 = \frac{\Delta V_1 + \Delta k_{10}}{1 - \frac{1}{10}}$ となる)である。

此の公式を直感された點は、其の洞察力の鋭さに感服させられるのであつて、織戸學士の如く問題を限定する限り、この公式で充分である。

然しながら、今、織戸學士の如く問題を限定するとしても、次の二點を看過する事は出来ない。

(一)、織戸學士は $\Delta C_2 \cdot \frac{1}{10}$ を公式の右項に加へる事の理由を説明して、「若し前年全不變資本が價值移轉

してしまつたならばかゝるものは存在しない。併し事實は $\frac{1}{10}$ しか價值移轉しなかつたから、第一部門に賣れ残りを生ぜざらしめん爲には之丈けの量を第二部門は其の剩餘價值中より買ふ様にしなければならぬ」と言つて居られる。後述によつても明であらう如く、 $\Delta C_2 \cdot \frac{1}{10}$ を公式の右項に加へねばならぬのは、如何

にも「消費手段生産部門の固定資本が $\frac{1}{10}$ しか價值移轉しなかつたから」である。然しながら、消費手段生産部門の固定資本が $\frac{1}{10}$ しか價值移轉されない場合には、何故 $\Delta C_2 \cdot \frac{1}{10}$ が公式の右項に加へられねばならないのか、其の事が説明されねば、單に「消費手段生産部門の固定資本が $\frac{1}{10}$ しか價值移轉しなかつたから」と言つただけでは、公式の右項に $\Delta C_2 \cdot \frac{1}{10}$ を加へる事の説明にはならぬ。そこで織戸學士は更に進んで、「(消費手段生産部門の固定資本が $\frac{1}{10}$ しか價值移轉しない場合には、然る限りに於て第一部門に賣れ残りを生ずる様になるのであるから、——(柴田)第一部門に賣れ残りを生ぜざらしめん爲には之丈けの量を第二部門は其の剩

- 5) 織戸學士は、最初の公式から此の公式を導き出す爲めに、非常に廻り道ををして居られるけれども、 $\Delta C_2 = \Delta V_1 + \Delta k_{10} + \Delta C_2 \cdot \frac{1}{10}$ $\therefore \Delta C_2 \left(1 - \frac{1}{10}\right) = \Delta V_1 + \Delta k_{10}$ $\therefore \Delta C_2 = \frac{\Delta V_1 + \Delta k_{10}}{1 - \frac{1}{10}}$ とすれば、極めて簡單である。

餘價值中より買ふ様にしなければならぬ」から、と言はれたのである。然しなから、此の理由は理由にならない。元來、 ΔC_2 は全部餘剰價值で買はれるのであり、其の事は、はじめから約束された事である。 $(\Delta C_2 \cdot \frac{1}{10})$ だけが餘剰價值で買はれるわけではない(二、参照)。而して、それが餘剰價值で買はれると言ふ事は、公式の左項の ΔC_2 で充分に示されてゐるのであり、それが餘剰價值で買はれると説明した所で、何等、右項に $\Delta C_2 \cdot \frac{1}{10}$ を加へる事の説明にならぬ。説明されねばならないのは、 $\Delta C_2 \cdot \frac{1}{10}$ に當る部分が餘剰價值で買はれねばならないかどうか、それが餘剰價值で買はれねば、第一部門に賣残りを生ずるかどうか、——それ等は、はじめからわかり切つた事であり、且つ、それがわかつて $\Delta C_2 \cdot \frac{1}{10}$ を公式の右項に加へる事の説明とはならぬ——ではなく、消費手段生産部門の固定資本が $\frac{1}{10}$ しか價值移轉しなかつた場合には、 ΔC_2 を購入する爲めの資金が、何故に、第一部門の第二部門に對する需要増加(前年度の需要以上の $\Delta V_1 + \Delta I_1$ 以上に更に $\Delta C_2 \cdot \frac{1}{10}$ だけ無ければならぬのか、而してそれは如何にして可能なのか、である。織戸學士は此の根本的な問題に答へないまゝ、換言すれば、此の點

擴張再生産表式について

に於ける根本的理由なしに公式を直感されたのである。それは、結果に於ては正しい公式ではあるが、それが得られたのは、寧ろ偶然である。

消費手段生産部門の固定資本が $\frac{1}{10}$ しか價值移轉されない場合に $\Delta C_2 \cdot \frac{1}{10}$ が公式の右項に加へられねばならぬ理由は、次の如く説明さるべであらう。

「元來、織戸學士の如く問題を限定する時に、均衡的に擴張再生産過程が進む爲めには、第一部門の第二部門に對する需要の増加(前年度の需要以上の)と、第二部門の第一部門に對する需要の増加(前年度の需要以上の)とは、同額でなければならぬ。所で、第一部門の第二部門に對する需要の増加は、我々の場合には、 $\Delta V_1 + \Delta I_1$ である。其の點には別に問題は無い。然るに、第二部門の第一部門に對する需要の増加額は、一寸考へると第二部門の不變資本の増加額 ΔC_2 の全額である様であるが、實はさうではない。固定資本は年々 $\frac{1}{10}$ づゝしか價值移轉されないで、我々の如き想定の下に於ては、消耗固定資本の補充の爲め生産手段需要額は、固定資本の $\frac{1}{10}$ に過ぎない。此の事は、今年の爲めに新しく加へられた第二部門の固定資本部分 ΔC_2 についても同様であつて、今年價值移轉されるものは、その

- 6) 織戸學士、前掲 18—20 頁。理解を易からしめる爲め、記號を、私の從來用ひ
來れるものに改めた。
7) 織戸學士、前掲 20 頁。

1/10であり、従つて、その消耗部分の補充の爲めの生産手段需要額は $\frac{1}{10} \cdot \Delta C_2$ に過ぎなく。然るに、去年は、その部分の全額 $\frac{1}{10} \cdot \Delta C_2$ だけ需要されたのである。従つて、今年の固定資本の増加の爲めの生産手段需要額 ΔC_2 を除外して考へれば、第二部門の第一部門に對する需要額は、 $\Delta C_2 \cdot \frac{1}{10} \left(1 - \frac{1}{10}\right)$ 即ち $\Delta C_2 \cdot \frac{1}{10} \cdot \frac{9}{10}$ だけ減じてゐる。従つて、第二部門の第一部門に對する需要の増加額は、 ΔC_2 の全額ではなく、 $\Delta C_2 - \Delta C_2 \cdot \frac{1}{10} \cdot \frac{9}{10}$ である。従つて、我々の場合に、均衡的に擴張再生産が行はれる爲めには、 $\Delta C_2 - \Delta C_2 \cdot \frac{1}{10} \cdot \frac{9}{10} = \Delta v_1 + \Delta k_{10}$ でなければならぬ。而して此の事は、 $\Delta C_2 = \Delta v_1 + \Delta k_{10} + \Delta C_2 \cdot \frac{1}{10} \cdot \frac{9}{10}$ として表現され得る所である。』⁸⁾

(二)、織戸學士は、「新たな不変資本の價值移轉部分……と ΔC_2 との差額がⅡに於て蓄積せられる」と言つて居られる。これは、(一)の敘述に際し指摘したる學士の誤謬に照應するものである。改めて論ずる必要は恐らく無いであらうが如く、(Ⅱに於て蓄積されるものは、決して生産手段の購入にあてられるものに限るわけなく、又、Ⅱに於て蓄積されるものうち生産手段の購入にあてられるものは ΔC_2 の全額であつて、決してそれ以

下ではない。

尚、公式を示したる後、織戸學士は、「Ⅱの總不變資本 C_2 對 ΔC_2 、Ⅰの總消費 $(K_1 + I_1)$ 對 $(\Delta v_1 + \Delta k_{10})$ の比は同様であるから二者はやはり此の割合であるべきである。」と言つて居られるが、 K_1, I_1 が何を指すのか示されてゐないし、假りに、 K_1 は前年の第一部門の資本家の消費量、 I_1 は今年の第一部門の勞賃總額と解釋すれば、如何にも、 $\Delta C_2 : C_2 = (\Delta v_1 + \Delta k_{10}) : (K_1 + I_1)$ であるが、さうだとすれば、それだからそれは「此の割合であるべきである」と言はれる場合の「此の割合」とは、當然、(一)である筈であり、して見れば、それが如何なる關聯に於て、「此の」と呼ばれるのか、殊に、その文章に續く所の、「此の關係」と如何なるのか、わからぬ。

むすび

以上私は、織戸學士に對して筆を執つた場合に何を問題にしたのであるかを評述し、併せて、此度發表された織戸學士の研究を吟味した。實は、織戸學士は、本稿に於て私の吟味したる所以上に、更に、蓄積率の變化の問題に一寸言及して居られるのであるが、その點に關しては、私自身の研究をまだ發表してゐないので、それを發表する時に觸れるつもりである。無遠慮なる言辭を弄したのであるが、それはすべて、親しく學問を論ずる友を得たるを感謝しつゝ草されたものである事を、學士はよく了解して下さいであらう。

8) 織戸學士、前掲 20頁。
9) 織戸學士、前掲 20頁。